

2022年度 入学試験問題

国語1科入試

国語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は60分間です。
3. 問題は□～□までです。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
5. 解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ものをつくる人間をダメにする確実な方法は、全体を考えさせず、細かい作業をひたすら義務としてやらせることです。そうするともう、現場での新しい発想が生まれてこなくなるだけでなく、**A**手を抜くかということばかり考える人が現れ、図面通り一〇〇パーセントのものすらできなくなる(また、そもそも図面に^aアヤマリがあつた場合にも、職人たちの直観によつて、それが「おかしい」と指摘されることも起こりにくくなります)。そうして作業を急がせれば急がせる^①ほど、杜撰^{注1}なものができるようになっていく。これは人間がつくっている限り、どうしても起こることです。特にサグラダ・ファミリアのように、何百年間もつくり続ける建物の場合、小さな手抜き積み重ねがやがて致命傷となり、建物を崩壊^{ほうかい}させることも十分に考えられます。^{注2}ガウディはそういう人間の性質をよく見抜いていました。

また、サグラダ・ファミリアの建設現場で(昔は今よりもはるかに危険な、一〇〇メートルの高さまで木で足場を組み、滑車^{かつ}で石を吊り上げるような作業を行っていたにもかかわらず)、今日まで死亡事故が一件も起きていないのも、職人たちが自ら考え、意欲的に仕事をしてきたことと無関係ではないと思います。昔は不十分な道具を使っていたからこそ、安全に細心の注意を払^{はら}っていたということもあつたと思いますが、^②それだけではないでしょう。事故というのは往々にして、人間を機械のように働かせているときに起こるものです。

ガウディは一九二六年の六月七日、サグラダ・ファミリアで過ごした最後の日の夕方、ミサに出かける前に、仕事を終えた職人たちに向かつて言いました。私はその一言に込められていた精神が、その後の建設を

も支え続けてきたような気がします。

「諸君、^③明日はもつと良いものをつくらう」(中略)

ガウディが弟子たちに残した重要な言葉の一つに、次のようなものがあります。

「人間は何も創造しない。ただ、発見するだけである。新しい作品のために自然の^{注3}秩序を求めめる建築家は、^④神の創造に寄与する。故に独創とは、創造の起源に還ることである」

この言葉の一つには、資源の問題として考えてみることもできるかも知れません。人間が**B**科学を発展させ、高度なものをつくれるようになって、その材料は常に自然から発見し、もらっているものです。植物や鉱物はもちろん、水や空気や光やさまざまなエネルギーもすべて、人間が無からつくり出せるものではありません。それができるのは、キリスト教的な言葉で言えば、創造主である神だけです(多くの日本人にとっては、神という言葉を使わず、純粹に自然と人間との関係で考えた方が理解しやすいかも知れません)。

その自然には、無駄のない関係性が存在しています。食物連鎖にしても、植物の光合成と動物の呼吸の関係にしてもそうですが、あるものの性質(機能)が、他のあるものを存在させる^⑤のに役立っている。その関係が巡り回って、結局は自らをも存在させているわけです。

ガウディはその関係性の世界を少しだけ膨らませ、自然から与えられたものを最大限有効に利用しながら、人間の役に立つものをつくらうとしていました。

たとえば、(中略)ガウデイが一九一四年に完成させたグエル公園の中にある、リッキョウを支えている柱です。その材料には、公園内の道路整備のために掘削された石が使われています。しかも柱の上には、当地に生えていたヤシなどが植えられている(植物の根が腐らないように、柱は水を通す仕組みになっています)。地面からもらったものを、人間の知恵を使って建物に変え、自然に戻しているわけです。グエル公園はほぼ全体がそういう考え方でつくられています。

それだけではありません。(中略)グエル公園の中央広場を縁取っているベンチです。その表面は、工場から出たり、寄付されたりした不良品のタイルで覆われています。

タイルというのは、割れたものももちろん、欠けたりヒビが入ったりしたものも商品にならなくなってしまいましたが、ガウデイはあえてそういうタイルを引き取り、割って使うことで、四角いままでは上手く貼れない曲面の被覆に活かしていました(また、タイルを破碎して使うことで、地中海地方の強すぎる光を拡散させることも考えていました)。

しかも、色とりどりのタイルがモザイク状に貼られたベンチは、芸術作品としてもすばらしいものです。注6。トランカディスと呼ばれるこの技法は、後に多くの芸術家たちに影響を与えました。(中略)

イ自然からもらったものを無駄にしない、ゴミを出さないどころか廃材を利用するという発想は、現代で言えばエコロジーです。しかし、もちろんガウデイの時代にそんな概念はありません。エコロジーという言葉がしきりに叫ばれるようになったのは、環境破壊やゴミ処理の問題といった対極の状況が深刻化してきたからだと思えますが、ガウデイはそれが社会問題になるなど誰も予想していなかった時代に、現代よりも

はるかに進んだ考え方で、エコロジカルな建築を実践していました。

その行動原理になっていたのは、自然の秩序を乱すような建物をつくるのは合理的ではないという思想です。そこまではつきりとした言葉で認識していたかどうかは定かではありませんが、ガウデイの作品には、明らかにそういう方向性が読み取れます。ガウデイは神が創造した自然に付け加えるように、建物をつくろうとしました。

同時にガウデイは、自然を「偉大な書物」と見なし、そこに書かれている秩序を神からのメッセージとして読もうとしていました。

宇宙を含めた広い意味での自然には、なぜそうなっているのか、根本的には誰にも説明できないものの、一定の秩序があり、それで大きな調和が保たれています。水や空気の流動性、光や音の反射、天体の運行までも支配しているさまざまな物理の法則……。あらゆるものがそれを離れて存在するわけにはいかない秩序の中で、人間も生き、また文明を進化させてきたわけです。古来、科学者たちは、その張り巡らされているものを物理や数学といった言語で読み取ろうとしてきましたが、それに対し、ガウデイは直観と手仕事を最大の武器として、形や色で読み取るうとしていたのではないかと思います。その読み取ったメッセージを活かして、自然からもらった材料を建物に変えようとしていた。それがガウデイの残した、「神の創造に寄与する」という言葉の大意だったのではないかと思えます。

たとえば、(中略)カサ・ミラの屋上にある煙突です。ソフトクリームのような面白い形をしていますが、じつはガウデイは、空気の流れを読んでこういうデザインを生み出しています。屋上を風が吹き抜けるときに、この煙突が空気をぐっと巻き込んで、気圧の差をつくり、中の煙を吸い出させる。飛行機が空を飛ぶときにも応用されている原理です。換気

扇せんがあまり普及ふきゅうしていなかった時代に、ガウディはそんなことを考えていました。

続いて〈中略〉カサ・バトリヨという集合住宅の中庭です。換気と採光のために設けられている空間ですが、その壁面へきに、日本で言う注7市松模様しりそうにタイルが貼られています。その色が、上層階から地上階に近づくにつれて、濃紺のうこんから白へと変化している。ガウディ・ブルーと呼ばれている大変美しい色調です。これはじつは、各階に届く光の量に色を対応させてあります。強い光が当たりやすい上層階には光を吸収しやすい色のタイルを貼り、光が届きにくい下層階には反射率の高い色のタイルを貼る。そのバランスを少しずつ変えていくことで、ガウディは、各階の住人が均等に光を注8享受きやうじゆできるように配慮りよしていました。

自然の秩序に形や色を対応させつつ、機能を充実じゆうつうさせようとすることが、結果的にデザインを生み出す方法にもなっているわけです。〈中略〉目に見えている自然の向こうに、目に見えない秩序を読み取り、それを建物の構造に活かそうとしていた。それがガウディです。

自然の中にある秩序を読み取っていくガウディの手法は、C的てきというより、職人的なものだったと私は思います。自然を言語で捉えとら、理論や公式を打ち立てていこうとするのがCの精神であるとするなら、自然を直観的に捉え、自分の手を信じて、とりあえずものをつくってみようとするのが職人の精神です。その中で、エ多くの失敗から学んでいく。

たとえば、石工というのは、石の世界の秩序を直観的に把握はあくし、材料を何らかの形に変えていこうとします。経験の浅い石工はそれを強引きやういんに

やろうとしますが、決して上手くはいきません。〈中略〉

職人でなくても、手でものをつくる人間は、みんな同じような感覚を持つていてのではないでしょうか。たとえば、長年農業をやっている人は、どうすれば畑全体によく水を行き渡わたらせることができるか、どうすれば強風や害虫から作物を守ることができるか、理屈くつでは上手く説明できなくても、経験から来る直観として分かっているはずで。それをもっとも重視して、手を動かしていく。それが手でものをつくる人間にとつての働くということだと思います。

ガウディは、そういう直観をあらゆる自然に対して発揮し、壮大な造形に活かしていた、神がかり的な職人だったのではないかというのが私の考えです。

(一部内容を省略しました)

【外尾悦郎『ガウディの伝言』】

注1 杜撰とせん：いかげんなこと。

注2 ガウディ：アントニオ・ガウディ。スペイン出身の建築家。一九世紀から二〇世紀にかけて活動し、サグラダ・ファミリア(聖家族教会)、グエル公園をはじめとする作品群は、ユネスコの世界遺産に登録されている。

注3 秩序：物事の正しい順序。

注4 掘削しや：土砂や岩石を掘り取ること。

注5 被覆ほく：物の表面を他の物でかぶせて包むこと。

注6 トランカデイス：スペイン語で「こわれたタイル」のこと。

注7 市松模様しりそう：二色の正方形を互い違いに並べた碁盤目模様。

注8 享受きやうじゆ：受け取って自分のものにする事。

問一 ــــــــــــــــ線 a 「アヤマ(り)」、b 「リツキョウ」をそれぞれ漢字に直しなさい。

問二

A	・	B
---	---	---

 に当てはまる言葉を、次のア～オからそれぞれ選
びなさい。(同じ記号を二度使用しないこと)

- ア どれだけ イ なんとかして ウ いか
エ どうして オ いつか

問三 ــــــــــــــــ線 ① 「ほど」、⑤ 「の」について、同じはたらきで用いられ
ているものを、次のア～エからそれぞれ選びなさい。

- ① ア 雪が凍こおってスコップが入らないほどだ。
イ 相手が強いほど闘志どうしがわいてくる。

- ウ それほど球技は得意ではない。
エ 身のほどをわかまえていない。

⑤ ア 光陰いん矢のごとし。

- イ 雨が降り出したので出かけなかった。
ウ こんなに寒いのに素足すすだ。

エ 妹はラジオを聞くのが好きだ。

問四 ــــــــــــــــ線 ② 「それだけではないでしょう」とありますが、今日ま
で死亡事故が起きていないということに対して、その理由を筆者は
どのように考えていますか。五十字以内で説明しなさい。

問五 ــــــــــــــــ線 ③ 「明日はもっと良いものをつくらう」とありますが、
この言葉の意味として最も適当なものを、本文中の ــــــــــــــــ線ア～エ
から選びなさい。

問六 ــــــــــــــــ線 ④ 「神の創造に寄与する」とありますが、それはどのよ
うにすることであると筆者は述べていますか。八十字以内で説明し
なさい。

(下書き用)

問七 ———線⑥「この技法」とありますが、その利点として適当でないものを、次のア～エから選びなさい。

ア 地中海特有の強い光を拡散できる。

イ ゴミを出さず、廃材利用ができる。

ウ 費用も手間も抑えることができる。

エ 曲面部分を貼るために利用できる。

問八 ニカ所ある C に共通して当てはまる言葉を本文中からぬき出さない。

問九 本文の内容として適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア サグラダ・ファミリアの建設現場では、自らの経験をもとに自然の秩序を読み取り、行動原理として作り上げた理論や公式を建物の構造に最大限に有効活用していた。

イ グエル公園には、環境破壊やゴミ処理の問題といった状況が社会的に深刻化するなどとは誰も予想していなかった時代に、エコロジカルな建築技法が使用されていた。

ウ カサ・バトリヨという集合住宅の中庭に、光を吸収しやすい色のタイルを貼り、光の反射量に色を対応させることで、換気と採光を目的とする空間が設けられている。

エ ガウディも、あらゆるものが自然の秩序を離れて存在するわけにはいかないことを理解したうえで、自然を「偉大な書物」と見なし、文明を進化させてきた一人である。

三

次の文章は、『犬がいた季節』という小説の冒頭の部分のあらすじと、それに続く場面です。これらの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

《本文までのあらすじ》

一九八八年、塩見優花は三重県四日市市にある進学校の高校三年生だった。ある日校内に犬が迷い込み、優花たちは飼い主を探したが見つからず、校長先生と交渉して校内で飼うことにした。その犬は優花の同級生の早瀬光司郎にちなんで、コーシローと呼ばれた。

優花は自分の学力に自信を持てずにいたが、秋以降、美術大学を目指してひたむきに努力する光司郎に刺激を受け、意欲的に勉強を進めて成績を伸ばしてきた。最近の模試では地元の国立大学だけでなく、東京の難関私立大学も一校だけ志望校に加えたが、どちらも合格可能性が高いという結果だった。

年末になり、優花はコーシローを預かることになったが、祖父母は家の中に犬がいることを嫌がった。大晦日、優花は光司郎を誘って、一緒に除夜の鐘をつきに行くことを約束した。その夜、コーシローと三階の自室にいた優花は、母に呼ばれて二階のリビングに下りていった。そこで模試の結果について、父からはほめられたが、祖父には次のように言われた。

《本文》

「男ならともかく、女の子が①東京の私立に行つてどうするんだ」

「別に私、行くなんて言つてないやん。でも……受けるだけ受けてみてもいい？ 記念に」

「行きもしない大学を受けてどうするんだ」

「どこまでやれるのか見たいっていうか。わかってるよ、お祖父ちゃん。家から通えるところしか行けないって」

模試の結果に優花は目を落とす。

「でもさ、普通、孫の成績が上がったら、ほめてくれたって……」

「お前は人にほめられたくて勉強してるのか」

「そうじゃないけど」

「お祖父ちゃん、優花にそんなにつらく当たらんでも。お父さんは立派やと思ってるぞ、優花のこと。鼻が高い。お祖父ちゃん、ほら飲んで」

徳利を持ち上げ、父が祖父の杯に酒を注いだ。勢いあまってこぼれた酒を祖父が口から迎えにいき、チュツとすすった。

「ああ、しみる……。いいか、優花。ちよつとばかり勉強ができるからつて、②テングになつたらいいかんぞ」

父さん、と言つたあと、父が「お祖父ちゃん」と言い直した。

「優花はテングになんてなつてへん」

「なつたらいいかんつて注意しとるだけだ」

祖父がうまそうに酒を飲むと、口元をぬぐつた。

「いいか、世の中には学校の勉強なんかより、もっと大事なモンがある。

お兄ちゃんを見てみる。中学、高校と荒れてたけど、今じゃこの家の長男としてしっかりうちの商売を支えてる。勇、ほら、お前も一杯飲め」

「俺、ポン酒よりビールのほうがいいんだけど。まあいいか」

兄が祖父の隣に座り、酒を飲み始めた。

②祖父、父、兄の男三人が並んで飲む姿を嬉しそうに眺めていた祖母が、みかんをむき始めた。

「ほら、優花はおみかん食べな。肌がきれいになるから」

食べたくはないが、祖母がむいてくれたみかんを黙って口にする。奥歯で噛みしめるようにして食べると、冷たい汁が口のなかに広がっていった。

おいしいやろ、と祖母が言い、優しく目を細めた。

「東京でしょぼしょぼ一人でご飯を食べるより、一家そろってみんなで食べたほうがうまいに決まったら」

そりやそうだ、と祖父がうなずいた。

「何はなくとも家が一番。みんなで食べればなんだったうまい」

三階からコーシローの吠え声が聞こえた。③母が「静かに、静かにね」となだめている。

階下を必死で気遣うその声に、怒りがこみあげてきた。

「そうかな？」

みかんの薄皮を口から出し、優花はティッシュにくるむ。

「みんなで食べるとおいしいって思ってるの、お祖父ちゃんとお祖母ちゃんだけだったりして。そりや楽しいよね。いつもご飯食べながら、私やお母さんに言いたい放題言ってる」

祖母がため息をついて、首を横に振った。

「おお、こわ。誰に似たのか、角が A ことを言う」

「どうしてお祖父ちゃんもお祖母ちゃんも、お兄ちゃんばかりほめて、私には嫌みを言うの？」

「こらこら、優花、お祖母ちゃんも」

祖母が何か言おうとしたのを父が制した。

「カッカしない、大晦日なんだから。楽しくやろうや。優花が角が

A こと言うだって？ 誰に似たかって、それは明らかにお祖母ちゃん似だ。みんな黙ってや。お父さんは優花と進路の話をするんやから」

「お父さん、俺、その話の前に優花に言いたいことがある。お兄ちゃんばかりほめてって、優花、お前はほめられるようなこと何かしたか？ 自分で稼いだこともなくせに記念受験だなんて、金遣うことばかり言ってる」

「そんな言い方ないでしょう。お兄ちゃんだって高校生のときは稼いでなかったやん！」

おつ、オリンピックの選手が出ると、と祖父がテレビのボリュームを上げた。

今年を振り返る映像のなかに、ソウルオリンピックで活躍した日本選手が映っている。

「高校球児もそうだが、スポーツ選手ってのは実に清々しい。見ろ、優花。a ヒタイに汗して励んだ奴らは、みーんない顔しとる」

「お祖父ちゃんは、どうしてスポーツ選手はほめるのに、勉強に励んでる孫には嫌みを言うの？ 勉強を頑張る子もスポーツを頑張る子も一緒じゃない」

兄が日本酒をあおると、杯をソファテーブルに打ちつけた。

「可愛くねえな。いいか、優花、教えといてやるよ。社会に出れば勉強ができるのと頭がいいってのはまったく別モンだからな。b 納品先にもおるわ。いい大学出ても、まったく使えねー奴」

「その人、単にお兄ちゃんとそりが合わないだけなんじゃない？ それに言うほど私、賢くないですから。うちのレベルが低いだけ」

祖父の猪口に酒をついでいた父が手を止めた。

そうやな、と父が寂しそうに笑った。

「お父さんは中卒やし。お祖父ちゃんも小学校しか出とらん。鳶が鷹を生んだようなもので、優花の気持ちはなかなか理解してやれんかもしれ

ん……」

「違う、そんなつもりで言ったわけじゃ……」

テレビの音がやけに大きな音で響く。父がリモコンを手に取り、テレビを消した。

階段を下りてくる足音がして、母がリビングに入ってきた。

「どうしたの、静かになつて。テレビは？」

祖母が二つ目のみかんを手荒くむきだした。爪が引かかったのか、わずかにしづきが上がっている。

いやね、と祖母がBをとがらせた。

「優花がどうしても東京に行くつて言うから」

「そんなこと言つてない！」

あなた、と母が非難するような目で父を見た。

「きちんと話してくれるつて言つたのに」

「そうなんだよ、優花」

父がこたつのわきから封筒を出した。

「お父さんは東京の大学を受けるのは賛成や。その話をしたくて呼んだのに、みんなが茶々入れるから」

えっ、と声をもらして、優花は父の顔を見る。

父が封筒から「受験生の宿」と書かれているパンフレットを出した。

「お母さんに詳しく話を聞いてな。優花のその、希望学部、そいつの試験日も調べて、昨日、受験生用のホテルも取つてきた」

注2 交通公社の注3 ロゴが入った封筒を開けると、新宿のホテルの予約票が入っていた。

「お父さんからのお年玉や。新幹線の注4 回数券も入れといたぞ」

「なんで回数券……」

「受かったら部屋探しとか、しなくちゃならんやろ。だめならお母さんと東京デイズニールランドに行けばいい。無駄にはならんよ」

兄がCを鳴らすと立ち上がった。

「なんだよ、昔からお父さんは優花に甘い！」

「勇には車を買つてやった。優花は車の代わりに大学へ行くんや。この話はこれでおしまい。みんな、優花がくじけるようなこと言うな」

父からもらつた封筒を両手で持つと、涙がこぼれ落ちた。

「お父さん、ありがとう……ありがとう」

「泣かんでいい、ほら、テレビまた見るか」

リモコンを取り、父がテレビの電源をつけた。祖父はごろりと横になり、祖母は不機嫌そうにみかんを食べている。

注5 紅白歌合戦は終わり、「ゆく年くる年」が始まつていた。場の空気を変えるかのように、母が明るく言った。

「優花、ほら、そろそろ注6 待ち合わせじゃなかったっけ？」

涙を拭いながら、優花は立ち上がる。

二階の洗面所で顔を洗い、部屋に上がつてコートを着た。

鏡を見ると泣いたせいで目が腫れ、髪がぼさぼさだ。ブラシで髪を梳かし、リップクリームが入った小さなポーチと小銭入れをポケットに収める。

犬の注7 リードを手にとると、外に行くことがわかつたのか、コーシロ―が跳ね回った。なんとかつかまえてコーシロ―を抱き、優花は一階に下りる。

「コーシロ―君も一緒なの？」

「えっ……」

階段を下りてきた母に聞かれ、思わず手にしたリードを床に落とす。

母がリードを拾い、コーシローの首輪に付けている。

「も、もちろん。一緒に連れていくよ」

顔を見られないように母に背を向け、優花は黒いスエードのチロリアンシューズを下駄箱から出す。背後から小さな声がした。

「記念受験だなんて言っていないで、優花、受かっておいで」

振り返ると、母がコーシローのリードを渡してくれた。

あかぎれで荒れたその指に、答える声が小さくなる。

「たぶん無理。日本中から受験生が来るんだもん。それに万が一、万が一だよ、受かったら……私が東京に行ったら、お母さんは一人で大変だ」

母は首を横に振った。

「ちつとも大変じゃない。お母さんがこの家を出たら、c コマるのはみんな。お母さんが本気で怒ったら誰もかなわないんだ。でも怒らない。お母さんには帰る家がないから」

注。満州で生まれた母は、引き揚げのときに両親と姉を亡くし、子どもがいない伯母夫婦のもとで育った。その伯母夫婦も今は亡く、他に頼れる身内はいない。

「でも優花は違う。優花には帰る家がある。お母さんが守ってるこの家だ。だから優花は本気を出していいんだ。お父さんもお母さんも応援してる」

母がコーシローの前にかがみ、頭を撫でた。

「コーシロー君とよくお参りしておいで」

「えっ、うん」

母が早瀬のことを知っている気がして、答える声が小さくなった。

「……おいで、コーシロー」

外に出ると、吐く息が白い。かじかんだ手を息で暖めながら、優花は

星空を見上げる。

東京の大学を志望校に入れたのは、力試しのつもりだった。祖父に言った言葉は嘘じゃない。

それなのに東京行きの切符をもらったとき、涙が止まらなかった。

この街に不満があるわけじゃない。

家族がきらいなわけでもない。

それなのに心ははやる。知らない街に行ってみたい――。

本気を出していいのだと、母は言った。

軽く首を横に振り、優花は駆け出す。

失敗するのが怖い。受かっても、絶対、自分の凡庸さに絶望する、わかってる。

ああ、と声が漏れた。

高らかに一声吠えると、隣のコーシローが前に走り出た。

それでもいいから、行ってみたい、東京へ――。

だけど……。

そんなつもりはなかったのに、④ 父を傷つけてしまった。

「ああ！」

暗がりのなかを、真っ白な犬が駆けていく。その背に導かれるようにして夜の道を走った。

【伊吹有喜『犬がいた季節』】

注1 テングになった：「天狗になる」とは、「得意になる。うぬぼれる。」という意味。

注2 交通公社：ここでは旅行会社のこと。

注3 ロゴ：会社名などをデザイン化したもの。

注4 回数券：乗車券などで、何回分かがセットになっているもの。料金が割安になる。

注5 紅白歌合戦・ゆく年くる年：前者は大晦日の夜、後者は年越しの時間に放送されるテレビ番組。

注6 待ち合わせ：優花は、幼なじみの雅美まさみと一緒に毎年恒例こうの除夜の鐘をつきにいく約束をしていると、母に話していた。

注7 リード：犬などを散歩の時につなぐひも。

注8 満州：中国東北地方の昔の呼び名。一九三二年から一九四五年まで、事実上日本の支配下にあった。

注9 引き揚げ：ここでは日本人が、第二次世界大戦後に日本が勢力を失った地域から帰国してくること。

注10 凡庸：優れたところがないこと。

問一 線 a 「ヒタイ」、b 「納品」、c 「コマ(る)」について、カタカナは漢字を、漢字は読みをひらがなでそれぞれ答えなさい。

問二 ニカ所ある A に共通して当てはまる二字の言葉を答えなさい。

問三 B ・ C に当てはまる漢字一字を、それぞれ答えなさい。

問四 線①「東京の私立に行つて」とありますが、優花は「東京の私立」大学を受験、進学することについてどのように考えていますか。本文全体の内容をふまえて、「くと考えている。」に続くように八十字以内で説明しなさい。

(下書き用)

問五 ——線②「祖父、父、兄の男三人が、眺めていた祖母」とありますが、「祖父」、「兄」、「祖母」の考えに当てはまらないものを、次のア～エから選びなさい。

ア 東京に行つて一人暮らしするよりも、実家から通える大学に進学した方が、優花本人と家族のためになる。

イ 優花は収入を得たこともないのに、受験で家族に大きな負担をかけようとすることには、納得できない。

ウ 大学で社会とは直接関係のない勉強をするよりも、実社会に出て働く方が、優花の性格に合っている。

エ 勉強ばかりしている優花よりも、体を動かして何かに励む人の方が大事なことを学ぶことができる。

問六 ——線③「母が『静かに、静かにね』となだめている」とありますが、母はなぜそうしているのですか。理由を六十字以内で説明しなさい。

問七 ——線④「父を傷つけてしまった」とありますが、優花は、どの言葉で「傷つけてしまった」と思ったのですか。《本文》中から一文でぬき出し、最初の五字を答えなさい。（句読点や記号なども字数にふくみます）

問八 次の一文は、《本文》中のどの部分に入れるのが最も適当ですか。直前の五字をぬき出して答えなさい。（句読点や記号なども字数にふくみます）

*それが人ではなく、犬のことを指しているのに気づき、あわてて答えた。

問九 《本文》の説明として適当なものを、次のア～オから二つ選びなさい。

ア 会話の場面が一人ひとりの視点から詳しく描かれているので、お互いに相手のことを理解しようとする様子が多面的に表現されている。

イ ちよつとした行動や態度から人物の心情やその変化が読みとれるので、会話の様子を通じてそれぞれの人物像が明確に浮かびあがる。

ウ 主人公が犬との交流によって勇気づけられることで、消極的だった受験や恋愛についても今後は前向きになることが暗示されている。

エ テレビについての描写がところどころさしはさまれており、家族の考え方の違いや気まずい空気をきわ立たせる役割を果たしている。

オ 登場人物どうしが相手と向き合いながら話し合うことで、衝突はしたがわかりあい、家族のきずながよみがえる様子が描かれている。